

日本旧石器学会  
ニュースレター 第52号  
NEWS LETTER No. 52  
JAPANESE PALAEOLOGICAL RESEARCH ASSOCIATION



## TFC Thematic Program 2022 国際シンポジウム・ワークショップを終えて

佐野 勝宏（東北大学東北アジア研究センター）

2022年9月末から10月初頭に、東北大学で国際シンポジウム（9月27日-29日）と2つの国際ワークショップ（9月30日，10月4日）を開催した。東北大学は、人類社会が直面する共通課題の解決に貢献する知の共同体として「知のフォーラム（Tohoku Forum for Creativity: TFC）」を創設し、様々なプログラムを支援している。本イベントは、知のフォーラムが支援するThematic Program 2022に採択され実現した。Thematic Programは、世界をリードする研究者を招待して国際シンポジウムやワークショップを開催し、重点的な議論から当該分野の研究を深め発展させると共に、日本国内の若手研究者の育成にも役立つ事を目的としている。

私が申請し採択されたテーマは、"Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics"である。国際シンポジウムは、Thematic Programと同じタイトルで、以下の5つのセッションで構成された。Session 1: Migration of archaic humans into Central and Northeast Asia, Session 2: Origin and expansion of *Homo sapiens* in western Eurasia, Session 3: The earliest migration of *Homo sapiens* into Central and Northeast Asia, Special Session: The Japanese Palaeolithic - Isolation and cultural exchanges, Poster Session。Workshop 1のタイトルは、Emergence of Regional Diversity of Northeast Asia, Workshop 2のタイトルは、Recovering Ancient Remains and Reconstructing Pastである。詳細は、シンポジウムのウェブサイトで確認できる（<https://www.tfc.tohoku.ac.jp/program/2164.html>）。オーガナイザーの出穂

雅実氏（東京都立大学），田村光平氏（東北大学），Stefano Benazzi氏（ボローニャ大学）と一緒に、自分たちの関心が最も高いテーマに絞り、それに合わせて発表者を選出した。

国際シンポジウムのセッション1は、中央・東北アジアにおける旧人研究に焦点を当てた。基調講演は、ロシア科学アカデミーの研究者で、ロシア・アルタイのチャギルスカヤ洞窟の調査主任であるKseiniya A. Kolobova氏に依頼した。セッション2は、ホモ・サピエンスの起源と西ユーラシアへの拡散に焦点を当て、基調講演にはマックスプランク進化人類学研究所・人類進化部門の所長でコレージュ・ド・フランス教授のJean-Jacques Hublin氏を招待した。セッション3では、東ユーラシアで認められるInitial Upper Palaeolithic (IUP) について議論した。基調講演は、ネアンデルタール人の絶滅年代が約4万年前であった事を明らかにし、PaleoChronプロジェクトでIUPの年代測定を精力的に進める、ヴィーン大学進化人類学部門教授のトム・ハイム氏である。

本シンポジウムを通して再確認したことの一つは、最新の分析技術が人類進化研究の進展に大いに貢献している点である。Hublin氏やTsenka Tsanova氏の発表で紹介されたブルガリアのバチョキロ洞窟出土人骨のDNA分析や、アルタイのデニソワ洞窟で見つかった骨片がデニソワ人とネアンデルタール人のハーフであることを解明したViviane Slon氏の研究は、ZooMSによって形態による種同定が困難な小さな骨片の中からヒトの骨を特定し、その骨のDNA分析を行うことで実現している。ZooMS等、コラーゲンのアミノ酸配列によって分類群や系統関係を復元する古代プロテオミクス研究の第一人者であるFrido Welker氏は、

この方法をチベット高原の白石崖溶洞（Baishiya Karst Cave）で出土した下顎に適用し、その下顎がデニソワ人に分類された成果を発表した。彼は、この方法でDNA分析が難しい古い人骨の系統関係の復元も行っている。

土壌DNA分析も、今後人類進化研究に貢献することが大いに期待される分野の一つである。Slon氏の発表では、デニソワ洞窟、チャギルスカヤ洞窟、スペインのガレリア・デ・ラスエスタトゥアス遺跡の土壌DNAから、ネアンデルタール人の通時的な遺伝情報を獲得し、体系的な系統樹を復元した研究成果が紹介された。更に、Dongju Zhang氏と共同で行った白石崖溶洞の土壌DNA分析では、デニソワ人のmtDNAも同定している。

今回のシンポジウム・ワークショップでは、デニソワ人について盛んに議論された。Xing Song氏の中国の中期更新世の人類化石に関する発表では、デニソワ人の候補となりうる人類化石について触れられた。また、Xing Gao氏の中国における中期旧石器時代石器群の発表では、その高い多様性が指摘され、その中にデニソワ人の石器群が含まれることを予見させた。中国科学アカデミー古脊椎動物古人類学研究所には、マックスプランク研究所のSvante Pääbo氏の下で古代ゲノム研究を学び、彼と多くの共著論文を出版したQiaomei Fu氏が古代DNA研究所を立ち上げており、今回彼女の代わりに発表したXiaowei Mao氏等、同研究所の若手研究者が成果を出し始めている。デニソワ

人の形質的特徴や彼らの考古文化が明らかとなる日は、そう遠くないであろう。

今回のThematic Programは、タイトルにある通り、考古学、古人類学、遺伝学の研究成果を統合的に議論することを主眼においていたが、こちらが期待していた以上に、それぞれの分野の成果が有機的に絡み合う議論が展開された。シンポジウムのセッション2では、Cosimo Posth氏がヨーロッパの後期旧石器時代から後期新石器時代に至る膨大なゲノムデータに基づき、LGM前後における狩猟採集民の集団動態を復元したが、その成果はWorkshop1で発表されたOlaf Jöris氏のヨーロッパにおける考古文化の拡大、縮小、転換の歴史に見事に合致していた。ヨーロッパでは、考古学や古人類学上の課題をゲノム研究によって解決する建設的な研究が既に数多く行われており、考古学、古人類学、遺伝学の学際研究においてずっと先を進んでいる。

一方、東ユーラシアを対象としたセッション3でも、Mao氏がLGM前後のゲノムの変化を示したが、その成果と考古学的現象の関係を正確に掴む段階には至っていない。東ユーラシアにおけるIUPの多様性の高さが今回のシンポジウムでも確認されたが、Workshop1のKelly Graf氏が基調講演で示したように、Early Upper Palaeolithic (EUP)になると、地域間での多様性は更に顕著となり、IUPからの連続性やEUPの地域間関係は未だほとんどわかっていない。バチョキロ洞窟のIUP個体の



国際シンポジウム対面参加者の集合写真

ゲノム研究から、その遺伝子はその後のヨーロッパ人には受け継がれていないのに対し、東ユーラシアの現代人にはバチョキロIUP個体の遺伝的寄与が認められることがわかった。しかし、現状の考古学や古人類学の成果は、いかにしてバチョキロIUPの遺伝子が現代の東ユーラシア人に残されるに至ったのか、明確な答えを与えることはできていない。東ユーラシアの課題が改めて浮き彫りとなったが、逆に言えば東ユーラシアは我々の研究で明らかにできる事が山ほどあるわけで、ヨーロッパの研究事例をモデルケースとし、今後効率よく建設的に研究を進めていくことができると期待している。

今回のイベントは、対面での開催にこだわった。中国からの発表者が日本には来られず、また諸事情で日本には来られない発表者もいたため、オンラインでの参加も可能なハイブリッド型式で開催したが、完全オンラインでは開催しないことをオーガナイザー間で決めていた。コロナ禍の水際対策、ロシアによるウクライナ侵攻、燃料費の高騰、急激な円安が起る中、対面での国際シンポジウムとワークショップを準備する事は、ここでは書き切れない大変さがあった。しかし、質疑応答後の休憩時間に議論を続け、懇親会でざっくばらんに意見を交わすことは、対面でなければ実現しなかった。今回、改めて学会を対面で開催する意義を感じた。シンポジウム中は、活発な質疑応答が展開され、休憩時間や懇親会の席で交わされた議論は、次の共同研究が生まれつつあることを感じさせた。参加してくれた多くの研究者が、テーマを限定し、3つの分野の研究者の発表を聞き、密に議論することができた点を喜び、また大いに楽しんでくれた。私自身、一週間に及んだこのイベントを実に楽しむことができた。

折しも、このイベント期間中に、Svante Pääbo氏がノーベル生理学・医学賞を受賞した（彼は、当初基調講演を快諾してくれていたが、開催を5月から9月末に延期した事で来日は実現しなかった）。人類進化研究は、人類社会が直面する共通課題を解決する上で、欠かすことのできない重要なテーマであることが認められたわけだが、本シンポジウム・ワークショップで語られた議論も、人類進化研究の発展に寄与するものであったと感じる。

## 2021年度日本旧石器学会賞受賞者報告

ニュースレター49号で報告しました通り、2021年度学会賞を島田和高会員（明治大学博物館）、2021年度論文賞を中村雄紀会員（北見市教育委員会）、2022年度若手奨励賞を戸塚瞬翼会員（東北大学大学院）が受賞されました。「日本旧石器学会賞選考委員会による選考理由」および「受賞者の言葉」を報告いたします。

### 2021年度学会賞

島田 和高 会員（明治大学博物館）

### 選考理由

学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員に授与する。学会員からの推薦に基づき、当委員会は島田和高会員を2021年度の学会賞受賞候補者として選考した。

島田会員は、関東・中部地域を中心に、石器石材の搬出入パターンの緻密な分析を重ね、後期旧石器時代における黒曜石の獲得・消費パターンに関する多くの研究業績を残している。これら一連の研究では、後期旧石器時代の各編年段階における黒曜石利用の変化が膨大なデータに基づいて網羅的に議論されており、日本列島に拡散してきたホモ・サピエンスの黒曜石利用の変化を詳細に知ることができる。また、後期旧石器時代前半期の環状ブロック群を体系的にまとめ、環状ブロック群の多様性とそれが形成された背景が、複数集団の回帰的集合による効率的な資源獲得に起因する可能性を指摘している。こうした仮説は、自身の研究によって見出された黒曜石の利用パターンの変化を根拠に据えており、着実に積み上げてきた研究成果を有機的に関連付け、旧石器時代の資源環境と人類の相互関係を総合的かつ具体的に解明している。更に、島田会員が担当した博物館での特別展や付随する図録では、日本列島の旧石器時代資料が網羅的に紹介、解説されており、日本旧石器研究の普及・啓蒙の面でも功績は大きい。以上のように、島田会員の一連の研究活動は、日本旧石器学会の発展に大きく寄与しており、学会賞を受賞するに相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 佐野勝宏）

### 受賞の言葉 島田 和高

この度は、2021年度日本旧石器学会賞の受賞の報を受け、驚きを受けるとともに、大変名誉なことであると、心より感謝を申し上げます。

私の仕事の原点あるいは基層といえるものがあるとすれば、中部高地黒曜石原産地でのフィールドワークから得られたものが大きいと思います。故戸沢充則先生の言葉をお借りすれば「遺跡は教室」に他なりません。1989年、黒曜石原産地に特徴的な大型旧石器時代遺跡の一つである鷹山I遺跡S地点の発掘に取り組んだ際には、いま思えば、石材原産地を含む地域的な遺跡の広がりや複合体を原産地での獲得行動とのかかわりによって考えるテンプレートが刷り込まれた気がします。また、国史跡となった星糞峠黒曜石縄文鉦山の1991年にはじまる長期的な調査からは、黒曜石利用には、石器時代的視野で俯瞰しなければいけない大きな変化があることを見せつけられました。

こうした研究の視点は、小野昭先生が主宰する発掘調査を核とした学際的な黒曜石原産地研究のプロジェクトに加えて頂いたことにより化学分析や古環境分析の同僚研究者から刺激を受け、ここ10年間で化学変化を起こしたようです。中部高地の過去3万年間の植生・景観の変化と中部高地産黒曜石の利用を比較した結果からは、試論とはいえ、面白い傾向が読み取れました。また最近では、携帯型の蛍光X線分析装置を持ち歩いて原産地の



島田 和高 会員

あちこちから得られた石器群を原産地分析することで、露頭近傍地域での旧石器人の黒曜石獲得領域や嗜好の細かな傾向やその変化を調べ始めてもいます。

現在進行形で白滝、置戸、腰岳、多久など古くから知られる石材原産地の研究が精力的に進められています。幸いなこととあってよいと思いますが、石材原産地と人とのかかわりの理解の仕方には方法的にも認識論的にも、未開拓の領域が広く残されています。今回の受賞を励みに、今後も研究に邁進させて頂く所存です。

### 2021年度論文賞

中村 雄紀 会員 (北見市教育委員会)

#### 選考理由

論文賞は、会誌『旧石器研究』に優れた業績を発表した会員に授与する。当委員会は中村雄紀会員を2021年度の論文賞受賞候補者として選考した。

中村会員は『旧石器研究』第8号(2012)に「愛鷹・箱根山麓の後期旧石器時代前半期前葉の石器群の編年」、第10号(2014)に「関東地方における旧石器時代の年代と編年」を発表した。両論文とも、石器群と年代サンプルの共伴関係が明瞭で、量的にも十分な年代値に基づくため、提示された各時期の年代幅の信頼性は高い。各遺跡の層序、年代値基礎情報、石器実測図、編年表等が、いずれも過不足なく効果的に提示されており、その総合的完成度は高い。第8号論文の石器群の記載では、器種組成、素材剥片剥離、二次加工、石器石材等が総合的に議論され、愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代前半期前葉の通時的変動と、初頭段階における武蔵野台地との相違が明瞭に示されている。また第10号論文では、武蔵野台地、相模野台地、北関東、愛鷹山麓の各層位段階の対応関係とその推定年代幅が示され、関東地方から愛鷹山麓にかけての後期旧石器時代編年の理解に大きく貢献している。したがって、中村会員の両論文は、論文賞に相応しいと考える。

(日本旧石器学会賞選考委員会委員長 佐野勝宏)

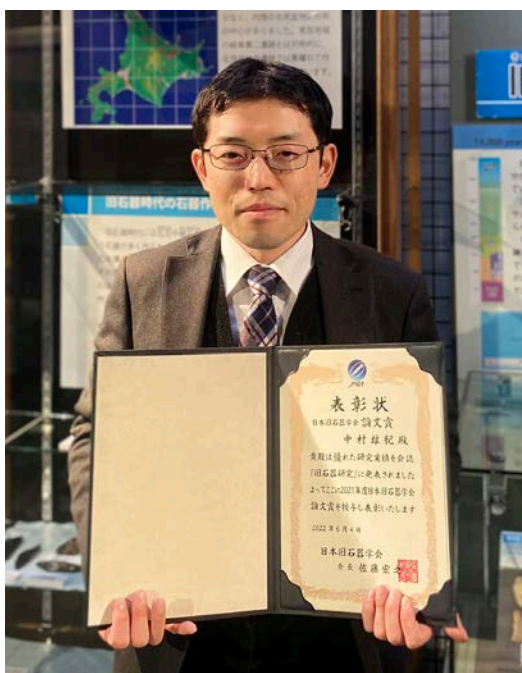
### 受賞の言葉 中村 雄紀

このたび、以前発表した論文が「論文賞」として、過分な評価を賜りましたこと、大変光栄に

思います。

今回、受賞の対象となりました論文「愛鷹・箱根山麓の後期旧石器時代前半期前葉の石器群の編年」（2012年）と「関東地方における旧石器時代の年代と編年」（2014年）とは、前者は言うに及ばず、後者についても、愛鷹・箱根山麓の資料の研究が下敷きになっているものです。後者の論文は、日本旧石器学会第11回大会シンポジウムでの発表内容を元にしたものですが、そもそも提示すべきデータ量が多く、シンポジウムの予稿集や発表で内容が十分に収まらなかったこともあり、改めて全体を提示できたことは、自分の考えを整理する上でも良い機会となったものであります。発表の機会を与えていただき、また論文の投稿を勧めていただいたことについて、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。結果として、この論文は意外にも少なくない方々に利用していただけたように思います。

とは言え、いずれの論文も資料を集めて整理する以上のところにはあまり踏み込んでいませんでした。また、年数が経ち、較正曲線は更新され、さらに新しい資料も追加されてきていることから、内容的には古くなりつつあります。2014年の論文の末尾では、この論文が石器群と気候や資源環境の変動との対比の端緒となる、と記していますが、いまだそうした成果を上げるには至っており



中村 雄紀 会員

ません。今回の受賞を励みに、今後一層の精進をはかっていきたいと思っております。

2022年度若手奨励賞受賞者

戸塚 瞬翼 会員（東北大学大学院）

選考理由

若手奨励賞は、日本旧石器学会の研究発表で優れた発表をした若手会員（当該年度4月1日時点で35歳未満）に授与する。当委員会は、戸塚瞬翼会員を2022年度の若手奨励賞受賞候補者として選考した。

戸塚瞬翼会員は、関東地方の後期旧石器時代前半期の台形様石器、基部加工尖頭器、背部加工尖頭器のマクロフラクチャー分析をおこない、それらの器種の中に狩猟具として使われた石器が含まれることを明らかにした。対象とした遺跡は40以上で、分析した石器の数は約1000点に及ぶ。関東地方だけでなく、日本列島全域においても、ここまで包括的にマクロフラクチャー分析が行われた前例はない。その成果は、当該地域においてどの器種がどの程度狩猟具として使われていたのかを知る上で重要である。また、分析した器種の中で、背部加工尖頭器の衝撃剥離の頻度が他の器種に比べて高い点は興味深く、衝撃剥離の発生頻度における石材の違いの影響に関する指摘は、当該研究の今後の更なる発展に寄与するものである。発表内容も良く整理されており、研究成果がわかりやすく示めされていた。以上の理由により、戸塚瞬翼会員の発表は若手奨励賞に相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 佐野勝宏）

受賞の言葉 戸塚 瞬翼

この度は、2022年度日本旧石器学会若手奨励賞を授与いただき、誠にありがとうございました。私の発表を評価し、貴重なお時間を割いて選考していただいた諸先生方には、改めて心より感謝申し上げます。

受賞対象となりました発表は、関東地方における後期旧石器時代前半期の遺跡を対象として行った、石器のマクロフラクチャー分析結果について述べたものでした。これまで世界各地で行われてきた投射実験研究の成果や指標的衝撃剥離痕の同定を基に、関東地方において実際に狩猟具として

機能した可能性の高い石器に関する基礎的なデータを収集できたと考えています。私にとっては、修士課程に入学して初めての研究成果であり、さらに初めての学会発表の場でこのように評価して頂いたことは、大変嬉しく思うと同時に、身の引き締まる思いであります。

分析の要である衝撃剥離痕の同定方法に関しては、佐野勝宏先生から極めて多くのことをご教示いただきました。発表内容にも繰り返し目を通していただき、その都度賜ったご助言によって、よりわかりやすく、より効果的な発表へと発展させることができました。受賞の言葉として、日頃より熱くご指導を頂いている佐野勝宏先生への格別の感謝の念をここに表したいと思います。また、考古学研究室の鹿又喜隆先生や、学部時代の指導教官であった長崎潤一先生をはじめ、これまでご指導いただいた多くの方々にも、改めて感謝申し上げます。

さて、発表でも申し上げたように、私の研究はまだ始まったばかりです。今後はマイクロ痕跡の同定を含む総合的な使用痕分析を取り入れるとともに、効果的な実験を実施することで、狩猟を中心とする人類行動の解明や環境適応方法についてのよりよい理解につなげていきたいと考えております。証拠となるデータを着実に積み上げながら、研究を進めていく所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



戸塚 瞬翼 会員

## 新刊紹介

森先一貴著『旧石器社会の人類生態学』同成社。  
290頁。2022年5月31日刊。6000円＋税。

「日本の旧石器時代を学ぶのに何か良い本はありませんか」。こんなことを学生から尋ねられることがある。旧石器への関心の糸を断ち切らせまいとあれこれ紹介はしているけれども、最近の資料やデータ、そして研究の状況をきちんと見渡して、かつ「日本の旧石器時代とはこういう時代なんだ」という語りを示している総論が欲しいなど思っていた。そのような折、本書刊行のお知らせが目にとまった。

著者はこう言う。「数万年を超える深層の歴史から、人間とは何か、現代社会とは何かを見つめ直そうとする機運が高まっているように思う。筆者自身もそのような取り組みを進めているが、そうした哲学的・思想的な挑戦は、長く時間を要する地道な基礎研究がなす沃野のうえに成り立つべきものだ。本書は専門性を備えた研究書として構成したものであるが、それはこのような目標を掲げての研究行為としておこなっている次第である」。なぜ日本の旧石器時代を学ぶのか。石器資料を通じて、私たちは何者か、どこから来たのか、そしてどこへ行くのかを考えたい、私は森先さんの目標をこういうことだと解釈して勝手に共感している。

本書ではこれまで著者が発表してきた多くの研究が下敷きとなって各章が生まれ、豊富なデータがうまいこと圧縮されて、読み応えのある通史を作り上げている。内容構成も一つの石器型式、石器技術、居住形態、集団関係、地域社会というように事実と解釈を積み重ねていって考古学的な整理がなされ、それにくわえて古生態データや象徴界・想像界といった自然や認知の側面への言及も忘れてはいない。社会・生態・認知を三位一体とし、それらを人類生態系史という大きな見方で包み込み、著者ならではの旧石器時代そして縄文時代の幕開けの歴史が語られる。

分析の特色として、一つは、放射性炭素年代値の徹底した洗い出しがあげられるだろう。著者にはすでに日本各地の地域編年を組み立てている実績があるから、確かな年代値によってその編年は

強固になる。その裏づけをもとに本書の記述は展開する。またもう一つの特徴は、フィールドプロセッシングモデルやフォレジャー／コレクターモデル、コレクター／プロセッサーモデルといった概念をうまく取り入れて、複雑な考古パターンを整理しているところである。これが功を奏して、人類生態系史に具体性を持たせることに成功している。

本書に記される考古学データは相当なものであって、それを鮮やかにまとめる著者のセンスの良さを感ぜずにいられない。多くの学生にこの本を手にとってもらいたい。大学授業の文献として利用されるばかりでなく、学生ゼミや学生・院生の研究会で輪読するテキストとして有益である。さらに内容を掘り下げるのもよし、問題点を見つけてその解決に取り組むのもよし。日本の旧石器研究の現状と水準を知り、本格的にこの世界に足を踏み入れる一冊になればと願う。

(仲田大人)

レベッカ・ウラッグ・サイクス著／野中香方子訳『ネアンデルタール』筑摩書房。604+ix頁。2022年10月10日刊。3600円+税。

本書の原題は"KINDRED: Neanderthal Life, Love, Death and Art"である。キンドレッドとは「親族」とか「親戚」の意。新人ホモ・サピエンスと旧人ネアンデルタールの間柄がずいぶん近いという最近の見方が端的に書名になっている。また、愛やら死やら類書には見られない言葉も副題に添えられているが、ネアンデルタール人遺跡から見つかる象徴遺物や埋葬例がサピエンスのそれと遜色ないものであって、ネアンデルタール人の「こころ」に迫る証拠も次々に報告されはじめている最近の状況をよくあらわしている。

ネアンデルタール人とは何者か。このテーマは150年以上も人類学者や考古学者を虜にしてきたし、悩ませてきた。しかしそれは今、ますます関心を高めている。その旗振り役を担ったのは、古遺伝学や地球化学を母体とする同位体考古学であろう。長いネアンデルタール人研究から見たら彼らの研究は新しい分野であるものの、分析の進展はたいへん著しい。その成果は、ネアンデルタール人はサピエンスの生存競争のライバルであるという見方を、私たちもネアンデルタール人の血を

受け継ぐ子孫なのだという見方へ大きく、そして劇的に転換させた。

一方で、考古学的には現生人類らしさという考古学的指標のいくつかがネアンデルタール人遺跡にも見つかるその報告が重要になる。オーカーにはじまり、貝殻ビーズや手形、あるいは鳥の羽根、爪などなど。そのなかで著者が印象的にとらえているのはフランスのブルニケル洞窟で見つかった石筍の構築物である。この記念碑的遺構については依然、謎が多い。これに類する遺構を人類はその後16万年間作らない。だからこそ、サイクス女史はこう述べる。「ネアンデルタール人の創造力には、わたしたちが思う以上の可能性がある」と。

本書は序章とエピローグのほか16章にわたって人類学的・考古学的証拠にもとづくネアンデルタール人像が克明に述べられる。確かに新人サピエンスと共通する考古学的行動を見てとることはできるとはいえ、ネアンデルタール人には彼ら彼女らなりの作法があって、それはサピエンスとは違うところがあると著者は考えているように見える。このことはサピエンスとネアンデルタール人の違いを強調するというステレオタイプの見方を支持するものではない。むしろネアンデルタール人の「声」に耳を傾けた、その歴史叙述だととらえるべきだろう。なお、本書で用いられた種々の引用文献は著者のwebページに掲載されている (<https://www.rebeccawraggsykes.com/biblio>)。参照されたい。

(仲田大人)

## 第21回大会一般研究発表・ポスター発表の募集

2023年6月24・25日に、東京都立埋蔵文化財調査センター（東京都多摩市）にて第21回総会・研究発表・ポスターセッションを実施します。ついでには、一般研究発表とポスター発表を募集します。発表の中からは若手奨励賞の選考も行いますので、若手会員の皆様には積極的なエントリーをお願いいたします。詳細については日本旧石器学会HPに掲載予定です。なお新型コロナウイルスの感染状況によっては開催方法について変更が起る可能性がありますので、学会HPでの確認をお願いいたします。

## 2022年度学会賞の推薦について

「日本旧石器学会賞規定」に則り、2022年度の学会賞受賞候補の推薦を募ります。旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員を推薦してください。

1. 推薦内容：学会賞受賞候補
2. 推薦期間：2022年10月1日(土)～2023年2月12日(日) (必着)
3. 推薦者の資格：日本旧石器学会員
4. 推薦方法：学会賞受賞候補の氏名、学会賞受賞候補の推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局あてに送付して下さい。
5. 注意事項
  - ・推薦は自薦・他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。
  - ・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限ります。推薦にあたって、学会賞受賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。
  - ・推薦の書式は自由です。
  - ・推薦理由は概ね100字から300字にまとめてください。
6. 応募先・照会先：日本旧石器学会事務局  
(担当：森先一貴・長崎潤一・鹿又喜隆)  
〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1  
早稲田大学文学部 長崎潤一研究室気付  
(jimu@palaeolithic.jp)。

## お知らせ

### メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものですが、これまでその登録についてはあくまで任意のお願いというものでした。

一方、新型コロナウイルス感染拡大にともない、各種学会行事の変更などがこれまで以上に増加することが予想され、学会と会員、そして会員間でのより迅速な情報共有が喫緊の課題となっています。その解決のためには、メーリングリストの更なる有効活用と登録率の向上が必要であることから、このたび役員会での議論と了承のもと、メーリングリストへの登録を原則として義務化することにいたしました。

た。ご理解を賜れば幸いです。

まだメーリングリストへの登録のお済みでない方は、携帯電話のメールアドレスでも構いませんので、事務局のメールアドレス (jimu@palaeolithic.jp) までお知らせください。

### 会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。ニュースレター50号同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。これまでもお知らせしておりますとおり、2018年度より年会費が6,000円になりました。御理解のほどよろしく申し上げます。

また、会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、50号同封の会費納入状況を御確認のうえ、2022年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

### 日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード (<http://palaeolithic.jp/join.htm>) し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第52号

2022年12月1日発行

編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会

赤井文人・仲田大人・山田和史発

行: 日本旧石器学会

事務局: 〒162-8644

東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部

長崎潤一研究室気付

E-mail jimu@palaeolithic.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>